

「子ども理解と教育相談」及び「子育て支援」に関する一考察

瀬々倉玉奈
(児童学科)

抄録 乳幼児保育・教育現場においては、子どものみならず養育者をサポートすること、即ち、子ども・子育て支援が必須となってきた。幼稚園教諭養成課程科目では「子ども理解と教育相談」であり、保育士養成課程科目では「子育て支援」が実践的な学びに該当する科目である。保育者による相談は学齢期における教育相談とは異なる点が多く、新たな理論化や実践の積み重ねが求められている。ところが、社会的背景の影響から保育学生が子どもと密に関わる経験は減少しており、養育者と関わる経験は更に乏しい。そこで、過去に筆者が行った保育学生と子どもとの関わりに関する調査結果を養育者との関わりの観点から再検討し、今回新たに行った実習における養育者との関わりに関する実態調査の結果と併せて考察した。

キーワード：子ども理解，教育相談，養育者，子ども・子育て支援，びっばらん

1. 問題と目的

(1) 乳幼児期の教育・保育相談

乳幼児保育・教育現場(以下、「保育現場」とする。)においては、子どものみならず養育者(以下、保護者を含む。)をサポートすること、即ち、子ども・子育て支援を行うことが必須となってきた。これについて「幼稚園教育要領」(文部科学省, 2017)では、総則第7において「幼稚園の目的の達成に資するため、幼児の生活全体が豊かなものとなるよう家庭や地域における幼児期の教育の支援に努めるものとする。」としている。

また、「保育所保育指針」(厚生労働省, 2017)には、第4章の子育て支援において、「1. 保育所における子育て支援に関する基本的事項」、「2. 保育所を利用している保護者に対する子育て支援」、「3. 地域の保護者等に対する子育て支援」に対象を分けて、より詳細に記載されている。特に、「2. 保育所を利用している保護者に対する子育て支援」の項においては、「(3) 不適切な養育等が疑われる家庭への支援」について言及しており、児童虐待への対応が強く意識されていることが理解できる。同様に、「幼保連

携型認定こども園教育・保育要領」(内閣府・文部科学省・厚生労働省, 2017)においても第4章で「子育ての支援」について詳細に記載されている。

幼稚園教諭及び保育教諭並びに保育士(以下、「保育者」と呼称する。)は、子どもを対象とした教育・保育に関わる知識や技術のみならず、養育者を対象とした子育て支援に関する知識・技術をも身につけておくことが求められている(中尾, 2018)。

また、保育者が上述の各種要領に従って教育及び保育を行えるよう保育者養成課程において実践的にそれらを学ぶ該当科目としては、幼稚園教職科目「子ども理解と教育相談」、保育士資格科目「子育て支援」が設けられている。

しかしながら、「教育相談」の授業内容は、小学校以降の教育相談のあり方の言わば借り物の状態であり、今後の理論化や授業内容の開発などが求められている(中根, 2019)。

幼稚園における教育・保育相談の実態は、通常のカウンセリングとは異なっている。保育現場における教育相談と、小学校以降の教育相談との最も大きな違いは、子ども自身が相談を依

頼めるかどうかという点にある。多くの場合は、子ども自身からの依頼ではなく、保育者が子どもの問題に気づき保護者と連携して対応していくことから、保育者が行う教育相談は、保護者支援であると言ってよい(中尾, 前掲書)。

(2) 本稿の目的

本稿の目的は、上述した保育者に求められている子ども・子育て支援の実践力に相応する準備が、保育学生時代にどの程度整えられているのかを明らかにして、今後の対応の可能性を考察することにある。そのため、以下の検討を行う。

- ① 過去に筆者が行った「赤ちゃんとの接触・育児経験に関する調査」(瀬々倉, 2016)を改めて養育者との関わりの観点から再検討する。
- ② 保育実習Ⅱ及びⅢでの子育て支援を学ぶ機会に関する調査の結果を明らかにする。
- ③ 保育者による相談支援に関する学びを保育者養成校でどのように行うことが可能か検討する。

2. 「赤ちゃんとの接触・育児経験に関する調査」の再検討

(1) 保育学生の子ども・養育者との関わり経験

先述したように、保育者には専門的な立ち場で子どもと関わるだけでなく養育者との関わりが以前にもまして求められるようになってきている。

しかしながら、就業形態の変化、少子化や晩婚・非婚の増加、核家族化や離婚・再婚による家族の在り方の多様化など社会背景の変遷と共に、保育学生であっても子どもと密に関わる経験は減少しており、ましてや養育者との関わりの経験は乏しい。この点について筆者は「赤ちゃんとの関わり体験調査」を行い保育学生であっても如何に子どもと関わる経験が少ないかを明らかにしている(瀬々倉, 2015)。さらに、2つの女子大学で同じ質問紙調査を行い、育児に関する基礎的な知識の有無にかかわらず、ミルクや離乳食を食べさせたり、オムツを替えたり

といった赤ちゃんのお世話、育児経験は乏しいことを明らかにしている(瀬々倉, 2015・2016・2019)。

(2) 「赤ちゃんとの接触・育児経験に関する調査」の再検討

原田(2006)は、10か月児健診時に、母親を対象とした育児に関する質問紙調査を1980年(大阪レポート)と、2003年(兵庫レポート)に実施している。それらの縦断的な調査結果を基に、現代女性の育児困難感は、少女時代から成人女性へと成長し、子どもを生んで母親となる過程において、子どもに接する機会が乏しくなってきたことが一因であると指摘している。

そこで、現代の女子大学生の赤ちゃんとの接触・育児経験の傾向を理解することを目的に、以下の調査を行った。

(3) 調査方法

原田の調査を参考に、これまでの赤ちゃんとの関わり経験について、2つの大学において質問紙調査を行っている。調査対象は保育及び幼児教育を主として学ぶ領域に所属する女子大学生である(表1)。

表1. 調査対象の年齢

年齢(歳)	18	19	20	21	22	23
A大学(人)	170	141	78	23	8	0
B大学(人)	0	85	100	15	0	1

(4) 結果

① 育児に関する基礎知識

まず、択一形式で平均的な在胎期間を尋ねたものを表2に、出生時体重を尋ねたものを表3に示す。

出産に対する最低限の理解の程度を確認する質問項目として、平均的な在胎期間と出生時体重とを尋ねた。質問の両方に正解した者は、A大学では83.3%、B大学では83.6%であり、両大学間での差は0.3%に過ぎなかった。

「子ども理解と教育相談」及び「子育て支援」に関する一考察

表 2. 在胎期間

月数	6月	8月	10月	12月	14月
A大学	0.2%	2.1%	87.6%	9.0%	1.0%
B大学	0.0%	3.5%	86.6%	8.0%	2.0%

表 3. 出生時体重

体重	1kg	2kg	3kg	4kg	5kg
A大学	0.0%	4.5%	94.5%	0.7%	0.2%
B大学	1.5%	2.0%	95.5%	1.0%	0.0%

ここで、両方の質問に正答した者を「基礎知識有り」、いずれか一方でも誤答した者を「基礎知識無し」と定義して、赤ちゃんとの接触経験、育児経験について両大学の学生の回答結果を分析した。

② 赤ちゃんとの接触経験

赤ちゃんとの接触経験を尋ねる質問項目として、「赤ちゃんをさわったことがありますか」を表 4 に、「赤ちゃんを抱っこしたことがありますか」を表 5 に、「赤ちゃんに関わったり、遊んだりした経験はありますか」を表 6 に示す。

A大学の合計とB大学の合計とについてのMann-WhitneyのU検定では、赤ちゃんとの接触経験を尋ねる3項目とも差は極めて高度に有意であった(p=.000)。

表 4. 赤ちゃんをさわった経験

	知識	よくあった	ときどき	なかった
A大学	有り	28.3%	62.3%	9.4%
	無し	21.4%	68.6%	10.0%
	合計	27.1%	63.3%	9.5%
B大学	有り	15.5%	73.8%	10.7%
	無し	6.1%	69.7%	24.2%
	合計	13.9%	73.1%	12.9%

基礎知識の有無の違いでは、両大学共に基礎知識が有りの者が無い者に対して、赤ちゃんとの接触経験を尋ねる3項目とも、より多く経験をしていた。しかしながら、B大学の基礎知識

有りの者でも、A大学の基礎知識無しの者よりも、赤ちゃんとの接触経験が乏しい傾向が示された。

表 5. 赤ちゃんを抱っこした経験

	知識	よくあった	ときどき	なかった
A大学	有り	25.7%	60.0%	14.3%
	無し	18.6%	65.7%	15.7%
	合計	24.5%	61.0%	14.5%
B大学	有り	12.5%	65.5%	22.0%
	無し	6.1%	48.5%	45.5%
	合計	11.4%	62.7%	25.9%

表 6. 赤ちゃんに関わったり遊んだりした経験

	知識	よくあった	ときどき	なかった
A大学	有り	27.1%	56.9%	16.0%
	無し	24.3%	61.4%	14.3%
	合計	26.7%	57.6%	15.7%
B大学	有り	11.3%	66.1%	22.6%
	無し	3.0%	54.5%	42.4%
	合計	10.0%	64.2%	25.9%

③ 赤ちゃんの育児経験

赤ちゃんの育児経験を尋ねる質問項目として、「赤ちゃんにミルクを飲ませたり、食べさせたりしたことがありますか」を表 7 に、「赤ちゃんのオムツを替えたことがありますか」を表 8 に示す。

A大学の合計とB大学の合計とについてのMann-WhitneyのU検定では、「ミルクを飲ませたり食べさせたり」では差は有意であり(p=.015)、「オムツ替え」では差は高度に有意であった(p=.002)。

A大学では基礎知識が有るの方が無い者より育児経験の経験値が高かった。これに対して、B大学では「ミルクを飲ませたり食べさせたり」では、基礎知識が無いの方が有る者よりも、「よくあった」と回答した者が2.5倍も多く、逆転現象が発生していた。また、「オムツ替え」でもB大学では、「よくあった」と回答した者が、基礎知識が無いの方が有る者よ

りも0.1%ではあるが多かった。

表 7. 赤ちゃんにミルクを飲ませたり食べさせたりした経験

	知識	よくあった	ときどき	なかった
A大学	有り	14.0%	31.1%	54.9%
	無し	5.7%	18.6%	75.7%
	合計	12.6%	29.0%	58.3%
B大学	有り	2.4%	32.7%	64.9%
	無し	6.1%	24.2%	69.7%
	合計	3.0%	31.3%	65.7%

表 8. 赤ちゃんのオムツを替えた経験

	知識	よくあった	ときどき	なかった
A大学	有り	17.1%	39.4%	43.4%
	無し	8.6%	32.9%	58.6%
	合計	15.7%	38.3%	46.0%
B大学	有り	6.0%	39.9%	54.2%
	無し	6.1%	27.3%	66.7%
	合計	6.0%	37.8%	56.2%

両大学ともに、基礎知識の有無に関係なく、赤ちゃんとの接触経験よりも、赤ちゃんの育児経験が不足しており、これは原田の調査結果とも共通した課題である。

A大学とB大学とにおいて、基礎知識の有無と赤ちゃんの育児経験との関係に逆転現象が生じている点については、自己評価のあり方が影響しているのではないかと推察される。なぜなら、育児経験の程度を評価する項目として、「よくあった」「ときどきあった」「なかった」の3択で回答を求めており、その捉え方は回答者の主観に委ねられているからである。

(5) 保育学生の育児経験と養育者との関わり

これまでの報告では、単に保育学生であっても育児経験が総じて乏しいことのみを報告していた(瀬々倉, 2016・2019)。

ここで改めて注目したいのは、赤ちゃんの育児経験における養育者と保育学生との関係である。本調査において「育児経験」としている

のは、「ミルクを飲ませたり食べさせたり」した経験と、「オムツ替え」の経験である。これらは、養育者が子どもを保育園や幼稚園にあずけている際に、保育学生がアルバイトなどで経験する育児経験を除外すれば、養育者と共にいる子どもへの育児行動であると推察できる。その場合、養育者が保育学生の育児行動について許可していなければならず、そこにはある程度の信頼関係が存在し、養育者との関わりのもとで行われているはずである。従って、赤ちゃんの育児経験の乏しさは、養育者との関わり不足とほぼ同義と考えられる。

本調査の対象は、保育者養成に関わる学部にも所属しており、子どもへの興味・関心は一般の女子大学生よりも高いと推測される。それにもかかわらず、赤ちゃんの育児経験が不足していることは、如何に現代社会における子どもや育児中の養育者への理解が高まらないことの一面を表していると考えられる。

両大学を比較すると、出産に関する知識には差が無いに関わらず、赤ちゃんとの接触経験、育児経験で共に有意差が確認された。大学によって経験値に差があることについては、今後の研究課題としたい。

また、A大学では基礎知識が有る者の方が無い者より接触経験、育児経験共に経験値が高かった。これに対して、B大学では基礎知識が有る者の方が無い者より接触経験の経験値は高かったが、育児経験については一部、逆転現象が確認された。これについても、今後の研究課題としたい。

本調査においては、両大学の調査対象の年齢差や実習経験を考慮していないことから、両大学間の差に注目するよりも、むしろ現代の女子大学生の傾向をつかむことに貢献し得るといってよい。

3. 赤ちゃんとの接触・育児経験に関する調査の再考察

調査結果から見えてくる保育者養成の課題
本調査の対象は、保育者養成課程に所属しており、子どもへの興味・関心は一般の大学生より

も高いと推測される。それにもかかわらず、赤ちゃんの育児経験が不足しているという実状からは、相当に意識して赤ちゃんと学生とが関わる機会を設ける必要に迫られていることが理解できる。

一方で、如何に現代社会における子どもや育児中の養育者への理解が高まらないかということの一因を表しているとも考えられる。

実際、幼稚園教育実習や保育実習の事前指導などにおいても、子どもと関わった経験が少ないことから不安を感じるという内容が学生から語られることが少なくない。

4. 実習における子育て支援の経験

(1) 実習園への事前の依頼事項

本項で扱うアンケート調査は、多様な保育を学ぶことが目的となっている保育実習Ⅱ(自己開拓園)及び保育実習Ⅲ(自己開拓施設)について行ったものである。従来は、3回生時に10日間行っているが、コロナ禍の影響で4回生時まで延期された学年があり、2022年度は3回生と4回生との2学年が、8月下旬から9月上旬の時期を中心に保育実習Ⅱを行っている。なお、本学児童学科の学生は、ほぼ全員が幼稚園教諭の免許と併せて保育士資格を取得することから、本稿では、特に「幼稚園教諭」と「保育士」とを区別することなく「保育者」と呼称することとする。

コロナ禍において実習を引き受けていただくことが、実習園には多大な負担をおかけすることは重々承知しており、あくまでも「無理のない範囲で」として依頼している。保育実習Ⅱにおける依頼文を抜粋して以下に示す。特に、本稿において強調したい箇所に下線~~~~を付している。

まず、学習のねらいについては、『保育実習Ⅱ』は、『園・クラスの活動に参加しながら、保育士の仕事を手伝ったり、様々な子どもや保護者と関わったりすることを通じて、保育所(園)の役割や保育士の職務、子どもの発達や障がい児保育、延長保育、家庭支援など、多様な保育についての理解を深めること』を学習のねらい

に位置づけています。」としている。

次に、内容の目安については、「①手遊びや歌、絵本の読み語りなど、短時間の部分実習を複数回行う。さらに、可能であれば、実習の後半で「指導案を立案したうえで主活動の責任実習」(30分～1時間、乃至は半日程度)を行う。

②可能であれば、登園及び降園時の保護者と保育士との関わりや、連絡帳を通じた保護者支援を学ばせて頂く。(上記の課題はあくまでも目安です。本学が依頼している実習期間は夏季中ですので、園児の休みや職員の方の夏季休暇・研修等で特別の保育体制をとっておられるなど、上記の課題(特に①の責任実習)が設定できないこともあろうかと存じます。貴園のご事情を優先して、課題・実習内容を設定していただければと存じます。)」としている。

(2) アンケート調査の方法

本項のアンケート調査の詳細は以下である。

【調査実施時期】

2022年9月23日～9月27日の3日間

【調査対象】

筆者が担当する3回生後期配当科目「子育て支援」3クラスの受講生合計103名。回答者数は92名で回収率は89.3%であった。先述したように2022年度は4回生も、保育実習Ⅱ・Ⅲを行っているが、アンケート実施に適した授業を担当していないため実施しなかった。

【実施方法】

□初回の授業終了時に、ポータル内のLMS上に設けているアンケートに回答するよう依頼した。

【質問項目】

以下の説明の元に、保育実習Ⅱ・Ⅲにおいて、子育て支援についてどのように学ぶ機会があったかを複数選択式で回答するよう求めた。

【アンケートの説明】

保育実習Ⅱでは、子育て支援を学ぶことも1つの目的となっていることを確認した。

既に保育実習Ⅱを終えている学生には、子育て支援についてどのように学ぶ機会があったかの回答を求めた。一方、保育実習Ⅱを終えて

いない学生には、「特に無し」にチェックをさせた。

(3) アンケート調査結果

表9は、保育実習(自己開拓)において、どのような子育て支援を学ぶ機会が有ったのかを複数選択可として回答した結果を集計したものである。約8割の学生が、「登園・降園時に保育者と親子の様子を観察した」と回答している。しかしながら、次いで回答数の多い「連絡帳を読ませてもらった」のは25.0%と、大きく割合は減少している。さらに、「子育て支援について、保育者に話を伺った」が19.6%、「登園・降園時に親子に直接関わった」と回答した者は、14.1%と1割強に過ぎなかった。また、「特に子育て支援について学ぶ機会はなかった」と回答した学生も7.6%いた。

今回調査した実習期間は、未だコロナ禍が続く中で行われたものであり、日々、状況が変化する中での保育の工夫を学ぶ機会を得たことに大きな意義がある。

もっとも、これまで特に調査という形式を取らず学生に聴き取った範囲でも、今回の調査結果と同様に、保育実習Ⅱにおける子育て支援に関する学びの機会は限られていた。

表10は、実習における子育て支援に関する自由記述である。この表において、具体的に学ぶことが出来た子育て支援の内容の箇所に波線の下線、子育て支援について経験できなかった内容の箇所に を付している。以下、表10の回答番号を付して説明する。

積極的に子育て支援について学ぶ機会が設けられた実習園では、園内の子育て支援施設を見学(1,9)、子育て支援活動の観察実習を経験した学生もいた(5)。また、地域の他機関との連携をどのように進めているかなどを学んだ学生もいた(4)。さらに、(8)に記載されている写真付きの園だよりの活用からは、ドキュメンテーションの手法が取り入れられている可能性が伺える。さらに、絵本紹介のお便りに関する工夫からは、「お便り」をきっかけに親子の交流を活性化す

るような働きをしていると推察され、保育現場ならではの子ども・子育て支援の一つであると理解できる。

また、保育実習Ⅲの施設実習においても、将来を見据えて子ども・子育て支援を行っていることを強く感じたと記述していたり(3)、保護者支援に関する会議にオブザーバーとして参加し、どのようにすれば子どもの安心につながるかを理解する機会を得た学生もいたりする(7)。一方で、連絡帳を見せていただくよう依頼してもプライバシー保護の観点から許可されなかった場合もある(10)。それぞれの園の方針で有り、致し方の無いことである。

本調査の結果からは、保育実習Ⅱの狙いの一つである子育て支援に関する学びの内容は、「登園・降園時に保育者と親子の様子を観察」という形が大半であり、約8割を占めることが明らかとなった。次いで、25%の実習生が「連絡帳を読む」経験をしており、約2割の実習生が、保育者から子育て支援について話を聞くという形で学んでいた。養育者と直接かかわった実習生は、わずか14.1%であった。保育者に子どもとのかかわりだけでなく、養育者とのかかわりや支援が求められていることを考えると、保育現場における子育て支援に関わる実習内容は、実際に保育者になったときには心もとなしと言わざるを得ないのが現状である。

5. 考察

(1) 保育者に求められる高い専門性

保育者には、遊びを通して子どもの育ちに寄り添うために、音楽や造形、絵本読み、運動遊びなどのさまざまな技術や理論の修得が求められる。加えて心理発達の促進モデルなどを理解し、それらを自らの中で統合して遊びや生活の中で活用するのである。

さらに、現代の育児環境を受けて、最前線で親子に関わる保育者には、子ども理解に基づくかかわりはもとより、養育者を理解して支え、協働関係を結びながら共に子どもの育ちに寄り添うというさらなる力量が求められている。

「子ども理解と教育相談」及び「子育て支援」に関する一考察

表 9. 子育て支援について実習で学んだ機会

	子育て支援について実習で学んだ機会	回答数(人)	割合(%)
①	登園・降園時に保育者と親子の様子を観察した	72	78.3
②	登園・降園時に親子に直接関わった	13	14.1
③	連絡帳を読ませてもらった	23	25.0
④	園内の子育て支援施設に行かせてもらった	5	5.4
⑤	子育て支援について、保育者に話を伺った	18	19.6
⑥	特に子育て支援について学ぶ機会は無かった	7	7.6
⑦	その他(具体的に記して下さい)	11	12.0
⑧	自由記述欄	11	12.0

表 10. 実習における子育て支援(自由記述)

番号	自由記述の内容
1	園内に、子育て支援ルームがあり、入園していない親子でも気軽に立ち寄ることができる。保育士が常にいるため、子育ての相談を常時できる状態である。ルーム内にも、おもちゃが豊富にあるため、子どもも楽しめる。
2	支援が必要な子どもにたいしてどのような関わりを持っているか保育士に聞いた。
3	保育実習Ⅲで将来を見据えて子どもに支援を行っているということを強く感じた
4	保育園に通う子どもの中に、保育園の近くにある療育にも通っている子どもがいること、母親とも相談して通うか決めていることなどを保育者に教えていただいた。
5	地域の家庭の子育てをサポートする子育て支援活動が行われていたため、観察実習を行った。
6	保育実習Ⅱではなく、保育実習Ⅲを選択していたので、保育園ではなく施設実習でした。今までの実習から回答します。
7	児童養護施設で実習を行い、子ども達が安心して生活できるように支援を行うだけでなく、保護者の方に対してどのような対応をとり、どのような支援を行っていくことが必要かを職員の方同士で話し合う会議を見させていただきました。
8	保育園の園だよりなどを見せてもらいました。子どもたちが園でどのように過ごしているのかなど写真付きでたくさん書かれていました。また、本を紹介した毎月のおたよりも見せていただきました。ランキングやカテゴリーごとにまとめられており、これを見て、絵本を買ったり図書館へ借りに行ったりする保護者の方もいると教えていただきました。
9	園内には地域子育て支援センターがあり、専用のおもちゃや絵本などが配置された部屋で親子教室が行われていました。見学する機会はなかったのですが、部屋が園庭に面していて中の様子が見えていたため、保育者が参加する親子を迎え入れる準備をしている様子や親子が集まって来る様子、その中でのやりとりなどを断片的にですが何度か見る事ができました。
10	直接関わると言っても、継続して入るクラスの保護者への挨拶、自己紹介であり、会話の内容も状況的にあまり聞けることはなかった。
11	家庭の様子も知りたいと考え、連絡帳を見せていただこうとすると、プライバシーを理由に断られたため、保護者との関わりもなかった。

文部科学省(2017)や厚生労働省(2017)によるECECの新たな指針からは、子ども・子育て

支援に関する理論や実践について、心理学的な側面からも学ぶ必要性が高いことが理解できる。

通常の幼児教育・乳幼児保育に加えて、親子支援の観点を持ち、これまでの知見を応用し、多職種との協働による支援実践が行える保育者が求められているのである。

一方、親子支援は、既存の学問領域を越えた比較的新しい枠組みであり、多職種・多領域間の協働や、既存の専門性の応用を必要とする活動である。保育者養成は、今、まさに、大きな転換期に直面しているのである。

(2) 保育学生の子どもと養育者との関わり

養育者が少子化や核家族化、希薄な人間関係の影響から、濃密な関わりを必要とする子どもとのコミュニケーションに困難を感じていることと同様に、同じ世代である保育学生もまた、他者とのコミュニケーションのとり方に困難感を抱いている。

筆者は、授業の中で臨床心理学に基づいた様々なコミュニケーションワークを採り入れている。臨床心理学的な観点に基づくコミュニケーションワークの積み重ねによって、グループ・フィンガーペインティングにおいて、模造紙上で交わされるコミュニケーションプロセスの質に変化が認められたことを報告している(瀬々倉, 2018)。保育者は、子どもを深く理解し、かつ、養育者の思いを理解した上で協働関係を結んでいく必要があるが、その前提として、他者とのコミュニケーション能力の向上が必要であるからである。

先述したように、保育者には、幼児教育・保育の高度な知識や技術が求められる。さらに、カウンセリングの基礎を学んだ上で、通常のカウンセリングとは異なる形で保育者ならではの子ども・子育て支援が求められる。

現代の保育者には、持てる知識や技術を応用して子ども・子育て支援に活用する力が必要である。

(3) 保育者養成課程における子ども・子育て支援の学び

保育者には、高いコミュニケーション能力と幼児教育・保育の知識や技術、そして応用力も

必要である。一方で、それに応じた教育は未だ十分とは言えず、保育現場に出てから初任の保育者は試行錯誤を繰り返して成長していく。

では、保育者養成課程における、子ども・子育て支援に資する実践的な学びしてどのようなことが可能だろうか。上述したように、保育実習において、子育て支援について実践的に学ぶ機会は限られているのが現状である。これは、コロナ禍のみならず人員不足など現在保育現場がさらされている厳しい現状も大いに影響していると考えられる。では、園実習以外には何ができるのだろうか。

まずは、本稿冒頭に挙げた関連科目「子ども理解と教育相談」や「子育て支援」などの保育者養成科目の内容の充実化である。保育者ならではの子ども・子育て支援の在り方に関する実践・研究の積み重ねが求められる。

また、大学における子ども・子育て支援活動の実施によって、地域援助活動を通じた学び、アクティブ・ラーニングを充実化することが益々重要となる。例えば、本学では保育現場や乳幼児の子育て家庭の協力を得て、子ども・子育て支援を実践しながら学ぶ「ぴっばらん」活動を行い子どもや養育者への理解やかかわりの在り方の学びを深めている。そのプロセスにおいては、乳幼児との関わりが乏しい学生の教育に特に注視し、必要に応じて幼児人形を使用して抱き方のコツを教えるなど、きめ細かな教育を行っている。対面形式で行ってきた活動を2019年のコロナ禍からはオンラインに切り替えて支援実践の充実とともに学生の学びを深めており、その活動は、内閣府発行の「子供・若者白書 令和4年版」に掲載されている(瀬々倉, 2022a・b)。従来の親子支援活動には無い、本学児童学科ならではの専門性に裏付けられ、深く親子に関わることのできるプログラム内容となっていると自負している。

しかしながら、地域貢献としての子ども・子育て支援活動自体の充実と、保育学生の学びとを両立させることは容易いことではないのも事実である。

一方で、2018年度に「親子支援活動『ぴっば

らん』に関する映像記録のデータ化」事業の一貫として行った複数のプログラムに参加した学生を対象とした質問紙調査の結果では、以下のことが明らかになっている(瀬々倉, 2020)。

①活動に参加した学生の満足度が非常に高い。②親子と密に交流することの難しさや新鮮さを感じたと同時に、難しさも再確認することができた。③連続性の中で親子に関わることで、親子や学生自身の変化に気づくことができた。④親子支援活動を改めて客観視するために、活動を映像記録化して行った質的研究に意義を感じている。⑤子ども・子育て支援の多様なあり方を知った上で、自分たちが実施可能な支援について考えることができた。

このように、少子化時代に生まれ育ち、子どもと関わる経験が必ずしも豊富とは言えない学生たちにとって、本活動は、通常の幼稚園教育実習や保育実習とは異なる学びの経験となっていることが理解できる。

さらに、2020年度からのコロナ禍においては、ICTを積極的に活用して、オンラインによるびっばらん活動を展開している。苦肉の策で開始したオンラインによる活動であるが、結果的に以下のような学びを得ることになった。オンラインによる活動では、対象年齢児以外のきょうだい、父親の参加、遠方在住の親子、日本語が話せない親子、聞こえに不自由があり字幕が必要な親子など多様な親子に保育学生が関わるのが可能となった。このことから、字幕を付けて録画を編集し、オンデマンドコンテンツとして親子や幼保園、子ども・子育て支援機関などに提供している。また、遠方に住む祖父母と乳幼児期の親子が再会する場にもなった。特に、Zoomのブレイク・アウトセッションを利用する家族毎の個別対応プログラムである「びっばらんシリーズ」では、子どもや養育者、家庭の様子を関与観察しながら理解を深め、録画を分析したうえでオーダーメイドの遊びを提供することを通して、実践の応用力を身に着けることができた(瀬々倉, 2022a・b, 前掲書)。

現在、子ども・子育て支援の観点をもち、支援実践を行える保育者の養成は急務である一方

で、保育者養成課程においては、従来の実習に加えて実際の親子支援を学内外で実践しつつ、学生を教育するという、実践と教育を並行して行う必要が生じている。

充実した親子支援を行うためには、教育環境の充実化と保育者養成に関する深い理解、地域子ども・子育て支援と並行して行う必要のある支援者教育という新しい枠組に理解が求められる。

保育者養成は、常に社会との繋がりの中で展開していく必要がある。VUCA(Volatility(変動性)・Uncertainty(不確実性)・Complexity(複雑性)・Ambiguity(曖昧性))な時代と言われている先の見えない状況で、専門性を発揮して親子に貢献するためには、単なるノウハウを教えることでは役に立たない。子ども時代に育てることの重要な内容として非認知能力が上げられるが、保育学生にも非認知能力を活性化する教育が必要である。

文献

- 原田正文(2006) 子育ての変貌と次世代育成支援, 名古屋大学出版会
- 厚生労働省(2017) 保育所保育指針
- 文部科学省(2017) 幼稚園教育要領
- 中根真(2019) 「幼児理解と教育相談」をどのように教えるか? —新任保育者研究の知見をふまえて—, 龍谷教職ジャーナル, 第7号, Pp. 1-16
- 中尾繁史(2018) 幼児教育における教育相談, 仁愛女子短期大学研究紀要, 第50号, Pp. 85-86
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省(2017) 「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」
- 瀬々倉玉奈・清水文(2022) オンラインによる子ども・子育て支援の可能性—コロナ禍2年間における活動の実践報告—, 京都女子大学教職支援センター研究紀要, 第4号
- 瀬々倉玉奈(2022b) ICT活用による多様性に応じた子ども・子育て支援を通じた保育者養成, 2022年度ICT利用による教育改善研究発表会, 公益法人私立大学情報教育協会 ICT利用教育改善発表会運営委員会, Pp. 126-129
- 瀬々倉玉奈(2022a) 第4章コラム NO.2, ICTでつな

がる乳幼児期の子供・子育て支援（京都女子大学親子支援ひろば「びっばらん」），内閣府，子供・若者白書令和4年版，日経印刷，Pp. 142-145・裏表紙

瀬々倉玉奈(2020)子ども・子育て支援に関する実践と研究を通じた学生の学び，京都女子大学教職支援センター紀要，第2号

瀬々倉玉奈ほか(2019)保育者養成課程における親子支援の実践と支援者教育—赤ちゃんとの接触・育児経験に関する調査結果をもとに一，京都女子大学発達教育学部紀要，第15号，Pp. 122-130

瀬々倉玉奈(2018)保育者養成におけるコミュニケーション・ワークの導入，京都女子大学発達教育学部紀要，第14号，Pp. 143-152

瀬々倉玉奈(2016)赤ちゃんとの接触・育児経験に関する調査，日本乳幼児教育学会第26回大会研究発表論文集，Pp. 236-P237

瀬々倉玉奈(2015)子育て支援としての大学講義—赤ちゃんとの関わり体験調査—，大阪樟蔭女子大学研究紀要，第5巻，Pp. 117-125

瀬々倉玉奈(2013)子育て教室における養育者間スクイグルと託児—親子分離の逆説的効果—，FOUR WINDS 乳幼児精神保健学会誌，6，Pp. 36-47

瀬々倉玉奈(2012)乳幼児期の子育て教室におけるスクイグル法応用の試み—親子の前言語・非言語的コミュニケーションの疑似体験—，国際幼児教育研究，20，Pp. 25-38

本活動を豊富なご経験を元に御指導頂いている外部講師の清水文先生にも感謝申し上げます。

倫理的配慮

本稿で取り上げたアンケート結果は、教育研究のために活用することを調査協力者に説明し、研究の主旨に同意を得た上で実施している。また、個人が特定できないよう十分に配慮した上で記載している。

謝辞／付記

コロナ禍にもかかわらず、実習をお引き受け下さり、学生たちをご指導くださった実習園や施設の関係者各位に心から感謝を申し上げます。

京都女子大学親子支援ひろば「びっばらん」にご参加頂き、学生の学びにご協力下さった親子の皆様にも心から感謝申し上げます。また、